

魚類の健康に及ぼす放射線の影響調査

東京大学名誉教授 鈴木 譲

放射能汚染は、それと知らずに棲み続ける福島の野生生物にも多大な影響を与えているはずですが、小さなため池に取り残されたコイの免疫系を解析することで健康への影響を明らかにできないか、こんなテーマを思いついたのは、浜名湖の東大附属水産実験所を退職した直後のことでした。充実した研究資材は活用できないので、できる範囲で個人的に取り組むしかありません。定年後は環境問題に関わっていたいと思い、昨年より高木仁三郎市民科学基金の選考委員に加えていただきましたが、こうした調査は同基金の趣旨にも合致するはずですが。

この夏、福島県飯舘村を訪ねました。コイから血液を採取して白血球を観察するだけなら一個人でも可能です。しかしせつかくの機会ですので遺伝子解析を九州大学の知人をお願いしました。これらの免疫関連データと、個体毎のセシウム蓄積量とを比較することで放射線の魚類への影響を評価できるはずですが、そのセシウム測定をちくりん舎に依頼したのです。

せつかくの調査ですから投稿論文となる高いレベルをめざしましたが、不運も重なり今回は不満足な結果となってしまいました。それでもコイ筋肉には最大 9600Bq/Kg という高いセシウム濃度が確認されましたし、白血球解析にも確かな感触が得られました。来年こそ完全をめざします。そのためにも、ちくりん舎が信頼性の高い市民測定所としてますます発展して行くことを期待して止みません。今後ともよろしく願っています。

プロフィール

東京大学大学院博士課程を修了後、水産学科助手、助教授を経て、2000年より浜名湖にある附属水産実験所に教授として赴任。本年3月定年退職。専門は魚類免疫学。1988年より16年間にわたって自宅近くの道路反対運動を展開。昨年より高木仁三郎市民科学基金の選考委員を務める。

